

# 吉井源太と明治

《35》

# 川辺で受けた祝福

最後に、吉井源太が受けた褒賞についてみておきたい。出品紙に多くの賞を受けたことは、紹介してきた。ここでは源太の活動そのものに対する二つの賞を見よう。

明治二十三（一八九〇）年に第三回内国勸業博覧会が東京上野で開催された。この時に天皇の前で名譽金牌を受けた。次のようなことが理由だった。

万延元年に初めて大型質桁を作り、その後、便利で良質な紙を製造した。ことに圧写用紙は他の国に比類を見ない。高知県はこれにより産出額が増大し、他の地方にも伝えて盛んになった。功績は国内に広まり、名声は海外にも及んだ――。

式は七月十一日に行われた。午前七時に会場に入り、十時から天皇の前で、金牌の賞から順に授与されたらしい。この時名譽金牌を受けたのは計七人だった。

明治二十七（一八九四）年には、緑綬褒章を受けた。同日に褒章条例により制定されたものだ。他に紅綬、藍綬、黄綬褒章がそれぞれの功績に対して授章された。

源太への授章の理由は、父祖の遺業を継いで製紙の改良に励み、このために家を傾けてもあきらめなかったこと、大型質桁を発明して同業者に伝えたこと、県内に三極の播種を図るとともに地方に及ぼしたこと、白土を米粉に代えて節約を

行ったこと、新しい紙を二五県に伝えたこと、だった。十八種考案したこと、品質改良などの方法を三府二十に県庁に行き、これを賜ったこと、新しい紙を二五県に伝えたこと、だった。



いの町にある吉井源太の生家。左上に緑綬褒章（いの町指定文化財）の額が見える

たど日記に書かれている。このあと、樺堤において懇親会があった。県からのお祝いの会であったかと思う。知事をはじめ、各官員が集まり、雨に濡れながら大酒をしたと書かれている。この樺堤というのは、鏡川河口にあり、浦戸灣に突き出した堤で、昔は料亭の並ぶ繁華街だったということも教えてもらった。

十二月十一日には穏やかな風が吹く中、今度は吾川郡の祝賀会があった。これもまた川原で催されたのである。これは仁淀川だったのだろうか。当時はよく川原で催しがあったらしい。ここで軍人を見送るという時もあった。北村唯吉著「紙の町・伊野に七色紙誕生の

謎を追う」の中には仁淀川がより身近であった様子が書かれている。源太は自らの仕事そのものに自信と誇りをもっており、その功績への賞が川のそばで多くの人に祝福されたというのは、とても似つかわしいことだという気がする。

この連載で源太さんの足音を少しでも感じていただくことができたとしたら、大変うれしいことだと思えます。生家を守っておられる吉井健児ご夫妻をはじめ、土佐和紙について教えてくださいました方々、連載をお読みいただいた皆様、ありがとうございました。

（おわり）